

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00932

研究課題名（和文）近世中後期の在村知識人と文化環境に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on village intellectuals and the cultural environment in mid-to-late early modern Japan

研究代表者

引野 亨輔 (Hikino, Kyosuke)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90389065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸時代中後期に羽前国村山地域における浄土真宗門徒の中心的存在であり、村役人を務める家柄でもあった工藤家の古文書を使用して、同時期の在村知識人がどのような文化環境で活動していたかを分析したものである。研究期間中に作成した古文書目録によると工藤家文書は約350点あり、そのなかには工藤家の当主が作成した遺言書や講釈の聞き取り、東本願寺参詣時に京都で購入した仏教書などが多数含まれている。そこで、本研究では、これらの史料によりつつ、工藤家の当主たちが、知識を獲得し、発信していく具体的な様相を解き明かした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代人は、インターネットを活用して必要な書籍や情報を手に入れたり、地域のカルチャーセンターで好みの教室に通ったりと、様々なルートで知識を獲得することができる。しかし、そうした文化環境に乏しい江戸時代の在村知識人は、いかなる手段で知識を獲得したのか。また、彼らは知的特権層（工藤家ならば東本願寺の学僧たち）から与えられる知識をひたすら受動的に受け取ったのか、それとも何らかの批判精神を鍛え上げていたのか。本研究では、以上のような観点から、知識人にとって普遍的な課題ともいえる、より高次な知識を獲得する工夫や、得た知識を批判的に検証する可能性に迫ってみた。

研究成果の概要（英文）：This research uses historical materials from the Kudo family, who were the core of Jodo Shinshu followers in the Murayama region of Uzen Province during the mid-to-late Edo period and who also served as village officials, to analyze the cultural environment in which village intellectuals were active. According to a catalog of historical materials compiled during the research period, there are approximately 350 documents from the Kudo family, including a will written by the head of the Kudo family, recordings of lectures, and Buddhist books purchased in Kyoto during a visit to Higashi Honganji Temple. Therefore, in this research, I used these historical materials to elucidate the specific ways in which the heads of the Kudo family acquired and disseminated knowledge.

研究分野：日本近世史

キーワード：江戸時代 浄土真宗 在村知識人 文化環境

=教化者、俗人信徒=被教化者という平板な図式へのはめ込みに終始するのではなく、より柔軟な姿勢で民衆知形成の実態に迫ることを目指す。

3. 研究の方法

既に述べたように、本研究の中核となった作業は、工藤家文書の悉皆調査と目録作成である。ただし、研究経費の交付が開始された2020年度は新型コロナウイルスの感染者が増加していた時期であったため、2020年度・2021年度については現地調査を実施することができなかった。そこで、工藤儀七ら江戸時代の浄土真宗信徒にとって重要な知識獲得手段の一つであったと考えられる、通俗仏書の刊行状況を網羅的に調査し、現地調査の再開に備えた。ちなみに、その研究成果は、「江戸時代における通俗仏書の出版と宗派意識」(『書物・出版と社会変容』29、2022年)として、研究期間内に発表することができた。

その後、2022年度末には、工藤家の理解も得て調査を再開し、さらに1年間の研究経費使用延長を申請して、工藤家文書全356点に対する目録の作成と貴重資料の写真撮影を終えることができた。なお、悉皆調査の過程で、全ての古文書は資料番号を付した中性紙封筒に入れ、また工藤家と目録を共有するなど、史料の継続的な保管を図るべく対処に努めた。

撮影した史料の分析については、工藤儀七が書き取った学僧の法話や、購入された刊行仏書、親族に向けた遺言書、近隣住民に向けた浄土真宗教学の説き聞かせ書など、彼の思想形成が表れやすいものを中心に進めた。刊行仏書については、上述の通り、事前に調査を進めていたこともあって、おおよそそれらの特徴を把握することができた。他方で、書き取られた学僧の法話は、量的にも膨大であり、なおかつ講者や法話の時期・背景も多岐にわたっているため、それらが工藤儀七によってどのように受け止められ、親族・近隣住民への説き聞かせにどのようなかたちで活用されたかは、分析し切れていない。今後、遺言書などへ法話や仏書が引用されるケースも考慮に入れつつ、さらに精緻な分析を進めていきたい。また、由緒寺院に伝わる種々の宗祖伝説、あるいは自筆名号・自作木像と伝えられる寺宝も、在村知識人の思想形成を促進する重要な文化環境の一つであると考えられるが、工藤家文書のなかに詳細な参拝記録が残されていないため、儀七の心情にまで迫る分析は行えていない。特徴的な略縁起などは比較的豊富に残されているので、これらの史料から、土地固有の伝説と在村知識人の思想形成との関係性を探ることも今後の課題である。

4. 研究成果

上述のように、今回の悉皆調査で目録化できた工藤家文書は全356点に及ぶが、ひとまずそこから在村知識人の思想形成に関する冊子体史料(法話の書き取り、刊行仏書、遺言書など)99点を抜き出し、史料群の全体的な性格を把握しておきたい。江戸時代は商業出版が成立した時代であり、寺院蔵書に占める刊本の割合も、宗派に関わらず上昇していく傾向にあった。しかし、俗人信徒である工藤家にとって、刊行された仏書を購入して浄土真宗教学を学ぶことは、まだまだぜいたくな行為であったらしい。これら冊子体史料のうち、刊本は16点にとどまり、残る83点は写本である。また、これらの史料は、享保年間(1716~1736)から明治・大正期(1868~1926)という長期にわたって作成もしくは購入・譲渡されたものであるが、署名などで工藤儀七の関与が確認できるものは32点に及ぶ。工藤家文書の形成には、18世紀終わりから19世紀初めに活躍した当主儀七が最も大きな役割を果たしていたことになる。

それでは次に、工藤儀七の思想形成に影響を与えた文化環境の特徴に迫ってみよう。儀七がこれらの史料を残し得た最大の要因は、やはり彼の家が先祖代々の篤信的な浄土真宗信徒であったことに尽きるだろう。実際に儀七の両親は、本山東本願寺への参詣を欠かさない信徒であり、彼も最初は両親に同行するかたちで本山参詣を果たしている。周知のように、東本願寺が寺基を構える京都は、商業出版誕生の地であり、仏書専門の書肆も多く存在した。そこで儀七も、本山参詣を好機として、幾つかの刊行仏書を購入している。ちなみに、そのなかの一つである『歎異抄』には、「御本廟参詣之折柄、惣同行中工相求者也、天明二寅十二月廿八日、聞徳寺同行 義七」の識語が残されており、興味深い。購入すべき書物の依頼を事前に受けていたかどうかは定かでないが、儀七は自分が独占所持するためではなく、檀那寺である聞徳寺(浄土真宗東本願寺派)の檀家仲間と共有することを前提として同書を購入していたのである。江戸時代の書物が現代とは比べ物にならない高級品であったことは当然だが、それでも18世紀後半になると、刊行仏書から仏教の教えを学ぶことは、限られた上層農民の特権ではなく、むしろ多くの村落農民にとって当たり前の行為になっていたことがうかがわれる。

もっとも、先祖代々の篤信的な浄土真宗信徒であった工藤家のなかで、取り分け儀七が学僧の法話を熱心に書き取ったり、刊行仏書を読み解いたり、近隣住民に浄土真宗教学の説き聞かせを行ったりした要因は、寛政7年(1795)に起こったある出来事に求めることができる。儀七の檀那寺でもある羽前国村山郡溝延村の聞徳寺は、寛政年間(1789~1801)に本堂再建に取り組んでおり、檀家仲間の中心的存在であった儀七も、かなりの借財を抱えつつ、この大事業を成功へと導いた。ところが、聞徳寺の本堂再建に一区切りがついた寛政7年に、羽前国最上地域の東本願寺派を代表する僧侶・俗人信徒ら総勢82名が聞徳寺を訪ねてきた。実は天明8年(1788)の京都大火で東本願寺の御影堂・阿弥陀堂が焼失しており、寛政年間には多くの浄土真宗信徒たちが京都に国ごとの「御小屋(=信徒たちの詰め所)」を設けて、再建に取り組んでいた。最上御小屋もその一つであるが、この御小屋の世話役を務められる人材が見当たらず、篤信的な浄土真宗

信徒として名高い儀七に白羽の矢が立ったのである。儀七は既に檀那寺の再建で多額の借財があることを訴え、この重責を断ろうとしたが、閻徳寺に來訪した僧俗たちは、借財の立て替えを条件に出してまで、儀七の世話役就任を懇請した。ちなみに、來訪した僧俗のなかには、最上地域の特産品である紅花の取引で富商となった柏倉文蔵や塩野権蔵の名前も確認できるため、閻徳寺再建のために儀七が抱えた借財は、彼らにとって十分立て替え可能な額だったのだろう。こうして儀七は、東本願寺の再建事業がおおむね達成された寛政12年(1800)まで、実に5年の長期にわたって最上御小屋の世話役を務めることになった。

儀七は後にこの出来事を「五ヶ年賦の御奉公にまかり登り候」と表現しており、かなり骨の折れる仕事であったことは間違いない。もっとも、溝延村にいたのでは接する機会もない高名な学僧の法話を聴聞したり、書肆の多い京都で刊行仏書を購入したりと、この5年間で儀七の思想形成にとって重要な意味を持ったことも動かしがたい事実である。それでは、やや特異な状況下で進展した儀七の思想形成は、工藤家文書のなかからどのように抽出することができるだろうか。儀七にとって最も重要な知識獲得の手段は、高僧たちの法話を聴聞することにあつたと考えられるが、上述のように法話の書き取り史料に対する分析は、まだ十分に遂行できていない。そこで、比較的分析が進んでいる刊行仏書の方に注目してみたい。

工藤家には浄土真宗教学に関わる刊行仏書が16点存在する。それらのなかには、前述の『歎異抄』や『蓮如上人御一代聞書』のように現代人になじみ深い仮名聖教も幾つか確認できるが、実はそれ以上の多さで著者を歴代宗主に仮託した偽撰の仏書も確認できる。それは『蓮如上人九十箇条』・『真宗授要篇』・『真宗教要鈔』・『親鸞聖人御法語』といったものである。かつて引野亨輔『近世宗教世界における普遍と特殊』(法蔵館、2007年)でも指摘したことだが、江戸時代には著者を親鸞・覚如・蓮如らに仮託した偽書が民間書肆によって大量に出版されており、工藤家文書のなかに存在するこれらの刊行仏書もそうした偽書の一部と考えられる。当初東西両本願寺は、民間書肆が出版する偽書の存在にそこまで過敏ではなかったが、次第に警戒心を強め、明和2年(1765)に至ると、西本願寺自らが『真宗法要』という聖教集成を出版して、本山お墨付きの聖教39部を明示することになった。こうした時代状況のなかで、なおも儀七は、著者を親鸞や蓮如に仮託した偽書から浄土真宗教学を学び取ろうとしていたわけである、それでは我々は、儀七の偽書購入という事実から、在村知識人の思想形成に対するどのような評価を導き出すべきなのだろうか。もちろん、文献考証のテクニックを磨いた江戸時代の学僧と異なり、儀七のような俗人信徒が真偽相混じる刊行仏書の問題性に無頓着であったことは間違いない。しかし、ここで法話の書き取り史料にも少し目を向けてみると、儀七は全ての法話に感嘆の意を示していたわけではなく、書き取った法話の後に「他見御無用」のような注意書きを記すこともあった。儀七のなかには、自分が聴聞した法話を檀家仲間にむやみに伝達することで引き起こされる混乱への警戒心も存在したわけである。それでは、儀七はどのような法話が地域社会の混乱を引き起こすと考えていたのか。まだ全体的な傾向は十分に把握できていないが、以下のような言葉は象徴的なものである。「同志ノ同行ニテコレナク候へハ誹謗ノモトヒト成リテ自損損他ノ罪思ルヘキ事ナリ」つまり儀七は、やや過激な論調(例えば阿弥陀一仏へと信心を集約させる浄土真宗において、神祇信仰への帰依は徹底して拒否せよとする主張)によって仏教他宗派との対立が発生することに警戒心を抱き、そうした語りはなるべく控えるべきという考えを持っていたことが分かる。

以上のような儀七の信念を踏まえると、彼が幾つかの偽書に魅了された要因についても、より深い考察が可能になる。例えば、上述の偽書のうち、『親鸞聖人御法語』には、宗祖親鸞が語った言葉として以下のような主張が確認できる。「京田舎ノ人々ノ、念仏申シナカラ、他宗ノ法ヲ誹謗シ、諸仏菩薩ヲウトミ、我朝ノ神祇冥道ヲカロシメ、専修ノ行者ハカリコソヨケレ、コレヲ雑行ヲステタル、一向専修ノ行者ナリト云者ノ候ハ、大師聖人ノ師命ニソムキ、愚禿力教化ニモ違スルモノナリ。(中略)他宗ヲ誹謗シ候人ハ、墮獄ノ罪人ナリ。ミナ釈迦如来ノミノリニテ、転迷開悟ノ教ナレトモ、末代濁世ニテ、聖道門ノ教八目出度ケレトモ、アサマシキ凡夫ハ成就シカタキ時ナレハ、時機相応ノ念仏ヲス、ムルコトニテ候。他ノ法ヲソシル人ハ、本師釈迦ヲソシル罪人ナレハ、弥陀ノ本願ニモレ候ナリ。」精緻な文献考証によって親鸞真撰本の峻別を目指した学僧たちにとって、『親鸞聖人御法語』が許されざる偽書であったことは間違いない。しかし、地域社会の現状を配慮しつつ浄土真宗教学を学んでいた儀七にとって、同書に載る宗祖親鸞の言葉は確かに学ぶべきものと映ったのであろう。

江戸時代の在村知識人である工藤儀七が、僧侶の教導を受動的に受け取るだけでなく、彼を取り巻く社会状況のなかで主体的に思想形成していたことは、「妙好人」たちとの交流からも良く読み取れる。妙好人とは、浄土真宗の篤信的な俗人信徒を指す言葉であるが、儀七は最上御小屋の世話役を務めた際に、京都で他国の妙好人たちと出会い、彼らと交わした会話を大切に記録して、近隣住民にも紹介しているのである。例えば、工藤家文書のなかには「口上書を以御年始申上候」という史料がある。同史料は、享和2年(1802)に儀七が近隣村落の浄土真宗信徒たちに送った年始挨拶であるが、ここで儀七はかつて最上御小屋で出会った妙好人たちの言葉を引用し、浄土真宗信徒の心がけを説いている。そのうち、「ミかわの国七三郎さま」から聞いた言葉は以下のようなものであった。「おまへかた八細によふ御聴聞なされてよるこばしやるか、わたくしハマアなんにもしりませぬ、しかし人にありかたからしようと思ふハ他力てハのふて自力の迷心、此南無阿弥陀仏様はかりハませものなしに此地獄へ落るわたくしを助けふとあつて本願御成就の南無阿弥陀仏さまぢや、唯にこにこととして御称名ヲ喜ぶのか信心の得だ印ぢや、如来

様八三十二間八十随形好とやらの御姿なれ八、我々八拝む事八ならね共、肉喰妻帯の凡夫姿にならしやつておかまれさして被下程に是程たしかな事八ない、なにもいふ事八ない、こことなしに御称名ヲ喜八しやれ」自らの無知と従順をひたすら披露する七三郎の言葉は、現代人にとって必ずしも強い感銘を引き起こすものではないかもしれない。しかし、儀七たちにとって、この言葉は字面以上のインパクトを有するものであったと考えられる。というのも、七三郎は後に西本願寺派の僧純が編集・出版した『妙好人伝二篇』でも取り上げられることになる高名な妙好人であり、享和2年には既に70代の老齢ながら本山東本願寺への敬慕の念やみがたく上京を果たした人物だからである。儀七たちは、伝え聞く七三郎の篤信的なエピソードを頭に思い浮かべつつ、彼の言葉に聞き入ったのであろう。「口上書を以御年始申上候」には、他にも「伊賀の敬信さま(=油屋三左衛門のこと)」や「三州之長松様」の言葉も紹介されており、京都の御小屋に詰めて東本願寺再建に関わることが、「諸国之名高キ御同行さまかた」と交流できる貴重な機会であったと分かる。さらに興味深いのは、『妙好人伝二篇』の出版が天保13年(1842)のことであり、少なくとも享和2年時点の儀七は出版物によらず浄土真宗信徒間で交わされる噂話などによって七三郎を妙好人と認識していたらしい点である。過剰なまでに篤信性が強調される『妙好人伝』のなかの妙好人たちは、彼らをそのように描き出さざるを得なかった編者=僧侶の政治的立場と関連付けて議論されることが多かった。もちろん、そうした分析手法が有効であることは疑いないが、俗人信徒である儀七が七三郎の言葉を上述のように活用している事実を踏まえるならば、多少異なる観点から『妙好人伝』という書物を評価することも可能であろう。すなわち、近世中後期の浄土真宗信徒たちは、仲間内で「妙好人」と讃える人物の言動を共有し、時に文字化して俗人信徒同士の教え諭しにも活用していた。そうであれば、僧侶が作為的な加工を施して『妙好人伝』中の妙好人を創り上げた側面だけでなく、既に俗人信徒によって生み出されていた妙好人のエピソードを文字化する文化が僧侶に波及していった側面にも、しっかりと目を向けて良いのではないだろうか。工藤家文書は、僧侶=教化者、俗人信徒=被教化者という研究者も鵜呑みにしがちな構図を、具体性をもって突き崩してくれる貴重な史料なのである。

以上、工藤家文書の分析により、現時点で判明している近世中後期在村知識人の知識獲得の実態を紹介してきた。もっとも、工藤家文書のなかでも、まだ十分な検討を加えられていないものが多く存在するため、今後も継続的な分析を進め、さらに研究成果を積み重ねていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 引野亨輔	4. 巻 29
2. 論文標題 江戸時代における通俗仏書の出版と宗派意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書物・出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 51-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 福田 千鶴、藤實 久美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 488
3. 書名 近世日記の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------